Library News
京教図書館 ニュース
2012年6月号 No.141

私のすすめるこの1冊

Andrew Obermeier （英文学科 准教授）

Charlotte's Web by E.B. White

When asked to recommend one book to the students and faculty of Kyokyo, without question I recommend *Charlotte's Web* by E. B. White because it is a story of friendship and hope that can be enjoyed by all ages. Also, as an English teacher, I can happily recommend it strongly as an exquisite example of American writing artistry. I have read and reread this masterpiece many times, and every time it is a new adventure.

The first time I read it, I was in the second grade of elementary school. As a young child I loved this exciting adventure story about a spider and a little girl desperately acting to save a little pig's life. I read it with wide open eyes, relieved that Wilbur was saved, but quite disturbed that the story did not end in the typical "happily ever after" way that I had learned to expect. Looking back at that time, I realize what the story taught me then; it was right after my grandfather died, and my mother gave it to me to read as a good way to understand death. More importantly, it helps any reader to understand how to live well through kindly helping others and acting bravely.

The second time I read it, it was assigned in class by my seventh grade English teacher. At 13, I read the book in an entirely different way. It is also a story about love. In the beginning, Fern loves Wilbur like her own baby. She saves him from death, feeds him, and cares for him like her own child. Although Wilbur dependently loves her like his mother, he is soon jilted when she falls in romantic love with a boy her age and seems to forget about Wilbur completely. The poor pig is heartbroken, but soon he meets Charlotte, a spider who shows him the love and care that a true friend can give. She saves Wilbur from being killed and eaten through the words she weaves into her web . More importantly, she saves him from his own limited beliefs about himself. Through kindness, wit, and industry she teaches him that he is not ordinary. Wilbur strives to embody the words in Charlotte's web by becoming *terrific, radiant,* and even *humble* and the town celebrates its miracle pig.

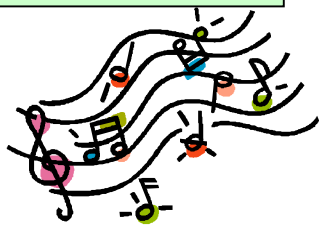
My third reading was much later. Living in Japan with a family of my own, I read it with my wife and children with new eyes. This time, I shared with my family many of the aspects just mentioned about living, loving, hope, and dying. In addition, having lived in Japan for many years, I had gained a much deeper appreciation of the four seasons and felt the book's strong ties to nature. Wilbur is born in the Spring, when everything surrounding him is fresh and new. He grows strong through the Summer, among the lively animals on the farm. The story's climax is in the Fall when Wilbur wins at the county fair, a celebration of the harvest. In Winter, Charlotte dies quietly amidst some cold, grey chapters. Then when the next Spring comes, Charlotte's children are born and Wilbur carries on Charlotte's legacy, teaching her children some of the things that she taught him. This is also a story about salvation, childish Wilbur is saved and in turn grows to help others; the story celebrates life - a beautiful, natural cycle.

The fourth, fifth, and sixth time I read it was last year, when I made it the main textbook for one of my classes. This time I read it as an English teacher. It is truly an exemplar of American prose - concise and yet bursting with vibrant description. A body of work has grown around *Charlotte's Web* that is a great support for intermediate English learners intent on developing their literary sophistication. *The Annotated Charlotte's Web,* by Peter F. Neumeyer explains the story's artistry in great detail. 「シャロットのおくりもの」(訳さくまゆみこ) is a delightful translation into Japanese. For movie lovers, there are two DVD movie remakes of the story, and I recommend the 1973 version for English learners because its dialogue and narrative are very loyal to the original text (the 2006 version is a disappointing Hollywood action drama). Lastly, I must mention one final, little book for more ambitious English learners that is co-authored by E. B. White: *The Elements of Style* - undoubtedly the foundation of American non-fiction writing style.

For lovers of good writing, *Charlotte's Web* is a romance that never ends.

＜私のすすめるこの１冊　で紹介された本＞

原書　*Charlotte's Web*　by E.B. White;　illustrated by Garth Williams
1963 年　Penguin　　所蔵有り　配置場所：児童書コーナー　請求記号：908.3 ‖ P 96
翻訳　『シャーロットのおくりもの』 E.B.ホワイト作 ； ガース・ウイリアムズ絵 ； さくまゆみこ訳
2001 年　あすなろ書房　　所蔵有り　配置場所：児童書コーナー　請求記号：J-2 ‖ W 68



第 18 回 「うたとおはなしの会」 報告

2012 年4月 28 日(土)に、 幼児教育演習室にて第１８回「うたとおはなしの会」が開催されました。当日は大型連休初日で、晴天にも恵まれ、約 120 名の親子連れで会場は熱気に包まれました。

まずオープニングで、タコに見立てた赤い軍手人形が登場し、ジャズの名曲「インザムード」に合わせて軽快なラインダンスを踊りはじめると、会場から「わぁ～っ」と歓声があがり、楽しい会の幕開けとなりました。続くパネルシアターでは、次々にいろいろな形のくもが出てくるたびに、「じーっと見てたら、じーっと見てたら…、何に見える？」という学生の問いかけに、「くるま」「かぼちゃ」「UFO！」…、と身を乗り出して大きな声で答える子どもたちの姿が目立ちました。

そして、毎回子どもたちが楽しみにしている楽器遊びコーナーでは、いろいろな楽器（フルート、クラリネット、トロンボーン、コントラバス）をもった学生が登場し、ビゼー作曲「カルメン」組曲第１番から「前奏曲」の演奏をしました。演奏が始まると、初めて見る本物の楽器を珍しそうにじっと見ている子どもや、おかあさんやおとうさんの膝の上で身体を弾ませながら音楽を楽しむ子どもたちの姿が多く見られました。その後、子どもたちもカスタネットやタンバリンなど、すきな楽器をもらって学生と一緒に「たのしいね」を演奏し、大満足の様子でした。

楽器の演奏で盛り上がったあとは、エリック・カールの名作絵本「はらぺこあおむし」です。子どもたちにも馴染みがあるこのお話を今回は、「読みきかせ」ではなく歌と音楽を用いた「歌いきかせ」で行いました。４歳の双子と参加した母親からは「家にも絵本があり、親しんできたお話ですが、歌で聴くのは初めてなので新鮮な驚きがあり、子どもも大喜びでした」と感想を述べていました。絵本の後も「あおむし」が登場する手遊びを親子で楽しみ、あっという間に最後のプログラムを迎えました。

プログラムの最後は、毎回大好評の人形劇です。今回は北欧民話「三びきのやぎのがらがらどん」を演じました。全体的に台詞と台詞の間に歌や音楽をふんだんに使い、橋や山などの舞台セットも工夫して子どもたちが楽しくお話の世界に入っていけるよう配慮しました。その結果、物語の見せ場「トロルが登場する場面」では、学生の迫力ある演技にお母さんにしがみつく子や、「どうなるんだろう」と真剣な顔で見入っている子どもたちの姿が印象的でした。また、保護者からも「本格的でびっくり！」「完成度が非常に高くて驚きました」など、たくさんの好評をいただきました。

人形劇をたっぷり楽しんだ後は、幼児教育専攻の新入生 12 名が子どもたちと一緒に「ホ！ホ！ホ！」を歌って閉会しました。帰りには学生が手作りした新聞紙の兜と風船をお土産にもらい、親子で楽しそうにかえっていく姿が見られました。

参加者からのアンケートでは、「期待以上でした。また来たいです。」「プログラムの構成、進行がよく練られており、最後まで子どもたちが飽きることなく楽しめました。」「子育てで忙しく、楽器の生演奏や人形劇などを子どもに見せてあげる機会があまり無いので、今回参加できて本当によかったです」など、多くの方に満足していただいた様子でした。

今後も、参加者からいただいたたくさんの意見を参考にしながら、よりよい会にするために内容の充実、表現技術の向上を図っていきたいと考えています。

（幼児教育科　平井恭子）

＜写真は一場面＞

図書館からのお知らせ

・・・・・・・・・・・論文検索・収集法講座を開催します・・・・・・・・・・・

雑誌に掲載された論文を専用のデータベースで検索する方法や、目的の論文を手に入れる方法を、パソコンを使いながら身につけてもらう実習型の「論文検索・収集法講座」を開催します。

希望者には、図書館内で雑誌を探しに行く、探索実習オプションも追加できます。

開催月日		講座と時間	講座と時間
6 月 4 日	月	海外編　11:00～12:00	国内編　15:00～16:00
6 月 5 日	火	海外編　11:00～12:00	国内編　15:00～16:00
6 月 6 日	水	海外編　11:00～12:00	国内編　15:00～16:00
6 月 7 日	木	海外編　11:00～12:00	国内編　15:00～16:00
6 月 8 日	金	海外編　11:00～12:00	国内編　15:00～16:00

申込方法：申込書、またはメール（氏名・希望日時を明記の上、library@kyokyo-u.ac.jp まで）

詳細については、附属図書館のホームページをご確認ください。

http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/course/2012/ronbun201205.html

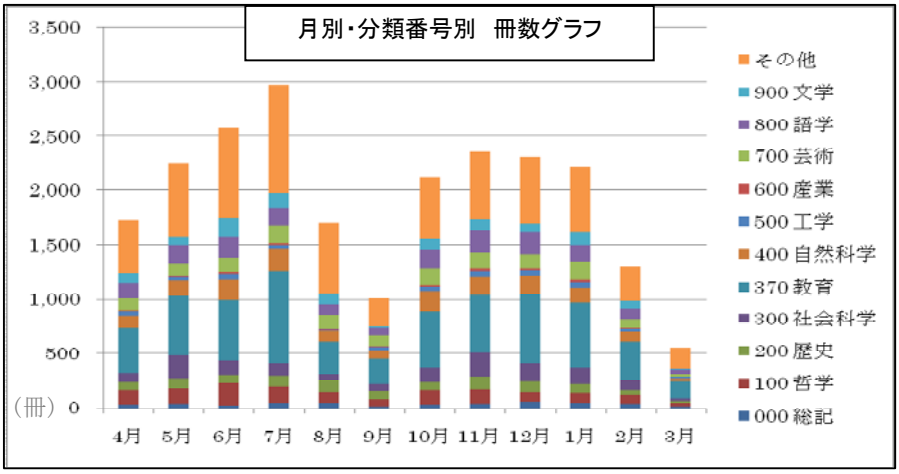
・・・・・・・・・・・・・・・製本中の雑誌があります・・・・・・・・・・・・・・・

現在、製本作業の準備のため、2011 年発行分を中心に一部の雑誌巻号を所定の配置場所から移動させています。利用を希望する場合は、カウンターにお尋ねください。

※6 月中旬から 8 月中旬頃まで製本作業を行う予定です。また、図書館改修工事に伴い、9 月から平成 25 年 3 月まで書庫を閉室しますので、上記の期間は製本雑誌を利用できません。ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力をお願いいたします。上記期間中に利用したい雑誌がある場合は、図書館カウンターにご相談ください。

・・・・・平成 23（2011）年度　図書館貸出統計（月別・分類番号別）・・・・・

月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
冊数	1,724	2,246	2,573	2,969	1,705	1,009	2,126	2,348	2,302	2,210	1,296	552	23060
人数	1,111	1,412	1,547	1,860	1,039	605	1,277	1,411	1,391	1,337	797	308	14,095



カラー版のグラフは、Web 版の図書館ニュースから見ることができます。

図書館トップページの「京教図書館 News」をクリックしてご覧ください。

論のくちび 理のむすび

京都教育大学紀要（大学発行の学術雑誌）に掲載された論文を、執筆した先生本人にご紹介いただくコーナーです

今回の執筆者 田中　多佳子　（音楽科 教授）

大正琴の伝播と変容　――台湾、インドネシアおよびインドの事例――

田中多佳子・尾高暁子（東京芸術大学音楽学部講師，民族音楽学）・梅田英春（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授，民族音楽学）

京都教育大学紀要．　2011，　No.120，　pp. 121- 137.

鳴った瞬間に消えてしまう音で成り立つ音楽の研究は、なかなかつかみどころがなく難しいものです。そこで、ここ数年は、音を出す道具でありながら消えてしまうことのない、「楽器」の観察を通じて、音楽の特徴や変化を読み取ろうとする研究に挑んでいます。長い目で見れば楽器も変容していくので、比較的最近の大正元年(1912 年)に、名古屋の森田吾郎が考案したという「大正琴」は、その点でうってつけの観察対象です。彼は、絹糸だったコトの弦を金属弦にし、卓上にものる小型のボディーに、タイプライターのようなキーをつけ、それで弦の勘所（かんどころ）を押さえながらギターのようにピックで弾く楽器を発明しました。マンドリンにも似たそのモダンな響きと、誰でも簡単に弾けそうな親しみやすさから、発明直後から爆発的な人気をみせました。さらに安価な「玩具」としてアジア各地にも輸出され、遠くアフリカ東海岸にまでも伝えられたことが確認されています。中には、異国の地で受容され、人々の嗜好に合わせて改良され、今日も盛んに演奏されているものすらあるのです。この事実はあまり知られていませんでした。

本論は、台湾、インドネシア、インドをフィールドとする三人が、大正琴の子孫たちについての調査を行い、その中間報告をまとめたものです。台湾では年輩の女性たちが音楽教室に集まり、マイ大正琴をアンプにつないで大音量でナツメロなどを合奏して楽しんでいました。インドの大正琴職人のもとには 2004 年以来 3 度通い、その由来を調べたり音楽や楽器の変化を観察したりしました。一方、バリ島では、この調査によって初めて存在を確認できたものも多く、掲載したカラー写真も貴重なものです。

今年はまさに大正琴生誕 100 年の記念すべき年です。今後もたくさんの仲間の「発見」に努めていくつもりですが、これを機に、この「日本発」の楽器に、より光が当てられてゆくことを期待しています。

本タイトルの論文は京都教育大学紀要 120 号に掲載されています。
後日、京都教育大学リポジトリ「クエリ（KUERe）の森」http://ir.kyokyo-u.ac.jp/dspace/ にも公開する予定です。

●開館日程●

※6 月 1 日(金)は創立記念日のため休館　　※7 月 4 日(水)は館内整理のため休館

カレンダーの凡例

日付 ○	9:00～21:00
日付 △	9:00～17:00
日付 ×	休館日

平成24年　6月

日	月	火	水	木	金	土
					1 ×	2 △
3 ×	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	8 ○	9 △
10 ×	11 ○	12 ○	13 ○	14 ○	15 ○	16 △
17 ×	18 ○	19 ○	20 ○	21 ○	22 ○	23 △
24 ×	25 ○	26 ○	27 ○	28 ○	29 ○	30 △

平成24年　7月

日	月	火	水	木	金	土
1 ×	2 ○	3 ○	4 ×	5 ○	6 ○	7 △
8 ×	9 ○	10 ○	11 ○	12 ○	13 ○	14 △
15 ×	16 ×	17 ○	18 ○	19 ○	20 ○	21 △
22 ×	23 ○	24 ○	25 ○	26 ○	27 ○	28 △
29 ×	30 ○	31 ○				

●京都教育大学附属図書館ホームページ
http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/
●携帯版図書館ホームページ （QR コード→）
http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/m/mhome.htm

京教図書館 News　No. 141 (2012 年 6 月号)
発行日：平成 24 年 6 月 1 日
編集発行：京都教育大学附属図書館
問い合わせ先：library@kyokyo-u. ac. jp

京都教育大学